

尻屋磯根資源調査

(要 約)

藤川 義一・黄金崎栄一*1・大水 理晴*2・松尾みどり・鈴木 亮

目 的

尻屋沿岸の磯根資源の状況を把握し、造成漁場を含む地先漁場の管理に資する。

材料と方法

平成 21 年 6 月 10 日に、太平洋に面する尻屋沿岸に 15 調査線を設け、各々の水深 2.5m、5m、10m、15m、20m にある計 66 調査点に潜水し、海藻を 50cm または 1m 四方の枠で 1 枠分、底棲動物を 1m 四方で 2 枠分採取し、種ごとに個体数と湿重量を求めた。底棲動物のうち、エゾアワビについては殻長を測定するとともに、貝殻頂部分の着色から人工種苗を判定した。6 調査線から採取されたキタムラサキウニのうち、漁獲サイズにある計 160 個について生殖腺重量を測定し、身入りを求めた。

結果と考察

1 2 年目マコンブ

2 年目マコンブは、11 地点で生育が見られ、生育密度が平均 2.4 本/m² で前年に比べ増加した。このため、本年のマコンブ漁獲量は前年以上であると考えられた。2 年目マコンブは藤石崎周辺の浅所で高密度に生育し、ここでは海水流動でウニを払いのける、いわゆる掃除効果によって生育が良好であったと考えられた。

2 1 年目マコンブ

1 年目マコンブは、6 地点で生育が見られ、生育密度が平均 1.3 本/m² で調査開始以来最小値を示した。1 年目マコンブが低密度であった理由は、1 月下旬の高水温によるマコンブの発生率の低下が考えられた。

3 エゾアワビ

エゾアワビは、調査海域の中央付近と南端の一部に比較的多く生息していた。平均生息密度は 0.3 個体/m² で、水深別では水深 2.5~10m で 0.5 個体/m² 以上、水深 15m 以深では 0.1 個体/m² 以下に留まった。殻長 9cm 以上の漁獲サイズ個体の割合は前年に比べ減少した。その一方で、殻長 4cm 以上 9cm 未満個体の割合が全体の 70% を占めたため、今後の漁獲資源への加入が期待された。

4 キタムラサキウニ

キタムラサキウニは、全地点の 86% に相当する 56 地点で採取され、生息密度が平均 3.5 個体/m²、現存量が平均 300 g/m² で昨年と同様高い値が維持された。水深 10m 以深では殻径 50mm 未満の小型個体が多く、資源の加入が考えられた。身入りは低い水準にあり、水深 2.5m では 15% 以上であったが、10m 以深では 9% 以下に留まった。

5 コンブ目海藻とコンブ目以外の海藻

マコンブ以外のコンブ目海藻は、ワカメ、スジメ、ガゴメが採取され、現存量はそれぞれ平均 50 g/m²、1.0 g/m²、4.3 g/m² でワカメが最も多かった。コンブ目以外の海藻は、ホンダワラ類ではアカモク、ウガノモク、フシスジモクが 3~7 地点で 177~972g、そのほか、ケウルシグサ、ウルシグサ、マクサ、ヌメハノリなど 30 種の海藻が平均 495 g/m² 採取された。マコンブ以外の海藻が多く生育する場では、キタムラサキウニの移植場として利用できると考えられた。

発表誌：平成 21 年度尻屋磯根資源調査結果報告書。青森県産業技術センター水産総合研究所，平成 21 年 8 月。

*1 青森県下北地域県民局地域農林水産部むつ水産事務所 *2 (地独) 青森県産業技術センター内水面研究所